

(1) 減少する都市空間におけるパラダイム転換

2005年をピークに日本の人口が減少を続けるとともに、成長と膨張の一途をたどってきた日本の都市空間は減少へと向かう。都市中心部で空き地が増え続け、コインパーキングに転換されていく風景は、経済的な景気後退、マイナス成長の局面毎に加速度的に拡大していく。これからの建築家は、縮小する都市の将来像を描くことが求められている。これを必然的な流れとして肯定するとともに、減速、減少、後退など負の価値観といわれるものをパラダイム転換し、最先端の経済活動やワークスタイルと人間性の回帰を両立させて建築的に提案していく好機ととらえることが重要である。建築は減少という状況変化の中で、量を誇った時代から、新たな価値をもつことで次世代に求められる質を具えた建築が勝ち残る時代に移行する。

急速な人口減少、高齢化の進行により、2030年までの今後20年間にワーカー人口は2/3となる。極論すれば都市部での建築はその1/3が不要となっていく。均質で退屈な都市部に、ただ何も使われない空隙が拡大していく状況を傍観するのではなく、代替できる100のアイデアをもって、社会に発信していきたい。

(2) インテレクチュアル・カフェからインテレクチュアル・キャピタルへ

都心部の業務地域の現状を見ると、人が交流する場が極めて少ないことに愕然とする。本来、都市の本質において交換と交流が重要であった。都市は人と物と情報の交換の場であり、多くの出会いが賑わいや魅力に繋がっていたはずである。IT化の発展後においても、そのバーチャルの限界を多くの人が共通認識としている現状において、交換や交流の場を都市部に復活させていくことは、都市の魅力再生において重要である。

今回の課題では、以下の3つの機能を複合した建築[インテレクチュアル(知的)・キャピタル(拠点)]の提案を求める。

- ① インテレクチュアル・カフェというトレンドがある。技術革新の促進のために設けられた『異分野の知識・技術の融合の場』のことであり、『海外の先端的研究者を含む異分野の研究者、経営者や技術者、企業、大学、公的研究機関、ユーザー等』を対象として研究開発の成果がより産業の国際競争力に結び付くための『交流によるイノベーションを生み出す場』である。利便性の高い都心部に立地することで、企業の研究者とユーザー(市民)の交流・コラボレーションの促進が可能となる。知的生産と更新を繰り返すことは、次代の付加価値を発信し続け、都市の活力を恒常的に維持する仕組みとなる。
- ② シンポジウムや学界の開催などはその都市の知的活動量のバロメーターであり、企業の研究開発拠点誘致や国際的な都市のブランディング戦略において重要である。知のコンベンションホール(見本市)ともいえる仕掛けやモノ情報を発信するショールーム機能、ギャラリー・音楽ホールのような芸術的な知の交換の場により人を集わせる仕掛けを用意することで、アクティブに都市への提案をしていく。
- ③ 知識創造を活性化させるワークプレイス: オフィスという言葉は、既に固定観念に支配されている。人が豊かなエクスペリエンスを通じて知的生産のために活動する場をワークプレイスと定義し可能性を求めたい。知識創造の場として計画し、“ひらめきが多く生れ、それを進化させる過程”を建築的に仕掛けること。

(3) 都市空間における建築的仕掛け＝2030年を想定して

今後、減少のデザインが存在価値をもち始めると、都心部では高層を誇る量のオフィス建築とともに低密度で空隙が多く豊かな空間性を内包するワークプレイスや電気自動車が行き交う50%以上緑化された街路から続く半外部的な環境を連続させた建築物など多様な価値観をもつ建築が増えていくものと想定できる。

対象敷地を名古屋市の中心部に設定するが、前述したように今後、空地が増えていくと想定する部分を各自、自由に設定できるものとする。容積MAXのような価値観でなく、質を高め、人を引き付け、名古屋の名所としてアピールできる建築が考案されることを期待する。

以上

【設計条件】

- (1) 敷地 : 名古屋市 広小路道路沿い 名古屋駅から千種駅の区間で自由に敷地を想定
- (2) 用途 : 以下の複合建築、ワークプレイス(研究施設やラボ、デザインファクトリー、スタジオ、一般オフィス)、知の交換を通じて集客できる施設(コンベンションホール、ショールーム、ギャラリー、コンサートホールなど)、交流の場(インテレクチュアル・カフェは様々な繋ぎの空間としてデザインされる)
- (3) 面積 : 規定なし
- (4) 規模 : 自由
- (5) 構造 : 自由(重力、風荷重、想定させている地震力等に耐えられるもの)
- (6) その他 : 隣接敷地、道路対面との関連提案(ブリッジの形成等)は自由
- (7) 法規制等 : 建築基準法など準用するが、特定街区制度による特例措置や建築材料や構造計算の大臣認定を使えば、超法規的に建築を自由につくれるものと解釈してかまわない。ただ、一般常識を逸脱しないこと。

【課題日程】

- (1) 10/ 8 (木) 課題説明
※以下の視点でエスキス: ①小さな空間単位としてワークプレイスを知的創造の場にするアイデア
②街の中で空隙を仕掛けるアイデア
- (2) 10/22 (木) エスキスチェック
- (3) 11/ 2 (月) 中間チェック1
- (4) 11/12 (木) 中間チェック2
- (5) 11/26 (木) 提出

【提出物】

- (1) エスキスチェック
 - ① スケッチ A3-1枚 (表現は自由)
 - ② 簡単なコンセプト模型 1/300~500 程度 (表現は自由)
- (2) 中間チェック1、2
 - ① コンセプトダイアグラム
 - ② コンセプト模型
 - ③ 主要階平面図
 - ④ 主要断面図

【最終提出物】A1 サイズ 2~3枚程度

- ① 設計コンセプト (600字以内)
- ② コンセプトダイアグラム
- ③ 配置図 (1/500)
- ④ 各階平面図 (1/200)
- ⑤ 立面図 (1/200)
- ⑥ 断面図 (1/200)
- ⑦ パース (着彩、模型写真利用等自由)
- ⑧ 模型 (1/200)
- ⑨ その他 空間性を表現する図等を追加することは自由

※ 計画規模により、図面スケールが適正でない場合は、講師、TA と相談のこと

以上

【課題の解説】

※1

従来、縮小を描いた都市デザインは存在していなかったが、2004年から2006年にかけて東京大学大野研究室により発表された“ファイバーシティ”が最初である。首都圏の縮小に対するデザイン戦略として、“コンパクトな大都市”を標榜し、放射状に延びる鉄道線に着目することで鉄道駅から歩行可能な 800Mの範囲を居住圏、以遠を緑地への転換を図るなど縮小による混乱を最小限にする理論構築がされている。首都高の公園化、名所の再構築などの提案を含みながら、面の開発でなく線状の再構築により『最小の介入で最大の効果』を挙げる手法を説いている。

名古屋市においても、広小路と錦に挟まれ東西に軸をなす業務領域(今回の敷地設定)、久屋大通の南北軸、若宮大通の東西軸、堀川など線状の都市基盤は、何度となく都市再生の議論・提案の的となっている。

※2

経済産業省がイノベーション創出に向けて知的カフェ(インテレクトチュアル・カフェ)の場作りにより出したのは 2007 年度からである。その狙いは、イノベーション(新たな価値の創造)の契機となる「知識の融合」活動が様々な場で自律的・自発的に幅広く展開されることであり、既に先進的な企業や地域において取組が展開されているインテレクトチュアル・カフェの普及である。

今回課題に類似する施設として現状はないが、知的創造拠点「ナレッジ・キャピタル構想」として、大阪・梅田北ヤードの2期開発において整備することが大阪市の開発イメージ(2009 年7月)に盛り込まれている。来年3月までのビジョン策定以後、2012年完成予定。但し、典型的な容積MAXの開発であり、建築的な魅力に乏しいと考えてよい。

※3

現代日本社会の中で、新たなアイデアをもち、次代の“富の萌芽”をベンチャービジネスとして世に問うことのできる人材と企業の重要性が増している。知的所有権をめぐる国家間の主導権競争は、iPS細胞などのバイオの例を見るまでもなく社会のあり様が知識を基盤としていることを物語っている。普及され汎用化された途端にコピー商品が現われ、利益低下を招く経済環境下において、新たなビジネスモデル、新素材、新商品が“富の源泉”といって過言でない。“創造”が“富の萌芽”であるとの認識はこれによっている。

※4

これまでのオフィス空間をマイナスイメージとして点検することで、今回のワークプレイスの反意語とする。

『安易に利用できるエネルギーに頼り、太陽の光や熱・風の力など制御に困難な対象を隔絶し、大規模かつ機能的に積層した環境を造り上げるビルディングタイプ』『均一空間を重視することで、人間の感受性、創造性に直接関わる脳の活動を逆に弱体化』

※4

誰も知的活動の中で“ひらめきの瞬間”を経験する。外をぼんやり眺める時であったり、帰り道ぶらぶら歩いているときであったり、シャワーの最中や就寝前のベッドの中であったりする。ポアンカレの言葉を使えば、「突然、天啓がくだった如くに考えがひらけて来る」という状態である。不思議なもので、悶々と向かうデスクの前では閃かない。日常的な知識吸収と創作シミュレーションなど問題意識の蓄積のうえで、外部的な刺激や自らの運動を伴う行為が触媒となり、脳の働きが活発になることによって“ひらめく瞬間”を迎える。雨音や木漏れ日の中など自然変化による刺激、速い速度で移動する飛行機や新幹線での視覚刺激・空間刺激や、階段の昇降、散歩などの運動行為、人とのコミュニケーションによりインスパイアされる刺激など多種多様である。建築学において、知的活動と建築空間の関係は、未解明な部分が多い。

※5

都心部におけるパラダイム転換として、

- ① 名古屋のような低密度の都市では、都心部でも空地率が増加し、地価の下落とともに容積MAXでなく空間の質を差別化要素とした建築に価値を求める可能性がある。
- ② 企業は、日本ではハイコストに見合ったハイレベルの知的生産性を求め、ワーカー人口減少とともに少なくなる優秀な人材を獲得するための競争力ある設備投資が不可欠となる。

[以上]